
難病と向き合ったから、知り得た事・・・

桔梗

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

難病と向き合つたから、知り得た事・・・

【NZコード】

N4827BA

【作者名】

桔梗

【あらすじ】

—いつものように、じく普通の生活を送っていたコナン。ある日突然、コナンに病魔が襲い掛かる・・・。未知不明の難病にかかつてしまつたコナン。みんなの思い・・・。様々な気持ちが交差する・・・。病気になりながらも笑うコナン。恐怖の、余命宣告・・・いつたいどうなつてしまふのか!?

病気の事は、現実ではないかも知れませんが・・・
そこは、無視でおねがいします。

第三作です！時間があつたら、夕方提載するかも知れませんが、主に、12：00提載か予約提載です。それでも、精一杯頑張りますので、よろしくお願ひします

- 1 - いつもの平和な日常（前書き）

いつも、桔梗です。活動報告通り、第三作「難病と向き合つたから、知り得た事」記念すべき一話です。一様、たくさん、書いてあるので、今日もう一話見たい！という方は感想にお願いします。限りあるので、一日にまとめて5話とかは無理ですが・・・毎日更新の予定ですが、全て夜中です。我儘な作者で変な所で段落が変わり読みにくいかもしれません・・・よろしくお願ひします。

- 1 - いつもの平和な日常

- 朝 AM 7:00 -

『・・・君・・コナン君朝よ、学校遅刻しちゃうよ・・起きて。』

いつものように、蘭の声で目覚めたコナンは布団から起き上がった。

「・・おはよ。蘭ねーちゃん。」

コナンは、まだ眠い目をこすりながら言った。

『コナン君、顔を洗つたら、『飯作つたから食べてね。』

言い終わった蘭は、朝食のある食卓へと向かった。
しばらくするとコナンは、顔を洗い終わり自分の席へと着いた。

『いただきますー』

三人が、声を合わせて食事の挨拶をし、一斉に食べ始めた。

三人とも、食べ終わり蘭は全ての食器を片し、コナンは、学校の準備をしていた。

さらに、10分経つと、哀と少年探偵団が探偵事務所に来た。
コナンは、彼らと一緒に学校に向かった。

『見たかよ！昨日のサッカーの試合・・

『す』かつたですよね。』

『コナンも見たよな？』

『見たぜーす』かつたよな！』

コナンは、サッカーの事になると子供のようになる。こつものこ
とだ。それを見た哀は、クスッと笑った。それに気づいたコナンは、

「なに、笑つてんだよ・・」

コナンは哀を見て、言った。

『名探偵さんも、サッカーの事になると子供みたいね。』

哀は、からかうよひと言つた。

「・・まつとけ。」

こつもの会話をお互にしていた。哀は、コナンには気づかれて

いないが少し、
うれしそうだった。

- そんな会話をしているうちに、学校に着きこつものように小学校生活を過ごしていた。

・・・この時は、誰も・・コナン自身も気づかなかつた。コナンの身に、恐ろしい病魔が襲い掛かってくるなんて・・

- 1 - いつもの平和な日常（後書き）

明日は、「ナンくんですね！」

今日は、書いたの4時なので 皆さんが寝ているかも 予約提載です

とても、一話一話短いかもしませんね・・・。そこは、「勘弁を・・・

あと、学校生活がメインではないので、必要最低限の所しか書いてません。

学校生活の話が好きな方は、すみません・・・。

Next conan's Hint (笑)

体の異常

次回もお楽しみに！

- 2 - 突然の体の異常（前書き）

桔梗です！今、ちょっと時間あつたので、更新します！

少し、質問です！

皆さん、好きなコナンキャラは誰ですか？

答えは、感想の所やメッセージでお願いします（^-^／＼）

- 2 - 突然の体の異常

— 曜 PM 12:00 —

給食の時間になり、いつも給食の時間が始まった。子供達にとっては一番の楽しみだ。

『 よりしゃー 一番ー。』

いつものように、一番に給食を食べ終わるのが元太である。
そして、いつも残し屋さんなのが・・・

『あーっ・・また光彦くん人參残してー。』

『あとで、食べるんですけどよおー。』

なんていって、言ひ合ひがしそうつむつだ。この時、マナンにはある異変があった。

いつもなら、完食するはずの給食がなぜか食べれないものである。
その異変を察知した哀が、

「マナンに尋ねた。

『どうしたの？』

哀は、心配そうに聞いた。コナンは、正直な事を言わずに哀に嘘をついた。

「……へ？……いや、ちょっと考え事してただけ……」

「コナンは、そう言い、哀に心配をさせないために無理やり口に給食を詰め込んだ。

哀は、その様子からひっかかる事はあつたが自分の給食を食べ進めた。

給食が終わり、掃除も完了し下校の時間となつた。

『ちよつなりー。』

子供達は、元気に挨拶をし、少年探偵団達もコナンと哀に声をかけ、一緒に下校した。

のちに、別れる道となり、少年探偵団達とは、明日ねなどと言つ合ひ、別れた。

哀とも、別れてコナンは一人となつた。自分の体がとてもだるくなっているのを感じ、立ち止まつた。

「（・・なんだ？なんか、ものすいぐだるい・・）」

コナンは、歩けないほどのだるさに自分自身でも訳が分からなかつた。

歩こうとしているが、足が動かず、腹痛と眩暈と熱が一気に襲い掛かってきた。

コナンのいる所はちょうど人通りの少ない所だったのか人は、全く通らない。

どんどん症状は悪化し、コナンは、その場に倒れてしまった。

- 2 - 突然の体の異常（後書き）

コナン君倒れてしましましたーーどうなるのでしょうか…
今日は、まだ更新します。しばらくお待ち下さいネ

N e x t c o n a n - s H i n t

意識不明のコナン

次回も、お楽しみに！

- 3 - 帰つてこない・・・

- P M 7 : 0 0 -

さすがに、遅すぎると思いコナンは博士の家にいると想つてコナンに、帰つて来てとコナンに向おうと博士の家に電話をかけた。

・・・プルルルツ・・・ガチャツ！

『はい。阿笠ですけど?』

電話に出たのは、哀だつた。

「あつ・・・哀ちゃん?そつちにコナン君いるでしょ?も'つ、帰つてきなさいつて、
言つてくれないかな?」

蘭は、そう言つたが、哀から予想外の言葉が返つてきた。

『・・・え?江戸川君来てないけど?帰つて来てないの?』

哀は、蘭に聞き返した。その言葉を聞いた瞬間に蘭は責めた。

「…………」

蘭は、ものすく焦った声でそう叫び放つた。

一方で、哀は蘭のコナンの様子を想い出し、心の中で考えた。

『（あの時、江戸川君は食欲がなかつたように見えた・・あの後
のが全部演技だと
したら・・）』

哀は、一つの仮説を立てた。元々凄腕の科学者だ。頭の回転は早
い。

『分かつたわ。私達の方でも探してみるわ。』

「うん・・お願い・・哀ちゃん・・・」

蘭は、泣きながら哀との電話を切った。

哀は、予備の追跡メガネを引き出しから出し、スイッチをつけた。

ピコッ・・ピッ・・ピッ・

追跡メガネは、反応した。

『（・・・やつぱり、バッジを持っていたわね・・・）』

しばらくすると、博士もトイレから戻ってきた。
哀は、博士に事情を説明し、一緒にコナンを探した。

『・・・この辺りだわ・・・』

そこは、人一人通らない道だ・・・

「新一――・・・」

博士は、大声で呼びかける。そして、哀も・・・

『・・・工藤君――・・・』

そして、そこに見つけた一人が見た光景は、とても真っ青だが、あきらかに熱があり。ピクリとも動かないコナンであつた。その光景に一人は、驚きを隠せなかつた。

「新一！」

『工藤君！』

真っ先に、駆け寄つたのは多少医学知識のある哀である。コナンの脈拍を確認し、コナンに意識確認を施す。

『博士・・救急車・・』

博士は、驚きで最初の哀の声が聞こえなかつたが、哀が必死に、

『早くつーー。』

その声には、必死さと助けたいという思いが詰まつていた。その声に反応し、博士は慌てて

119番に電話をした。その間に、哀はコナンの病状の確認をし

ていた。その病状は、一刻を

争うものだつた。コナンは、呼吸が弱くなつており、熱も触らなくとも分かるくらいに、

上がつていた。一番の問題は、気温が低い外に長い時間倒れていたのだ。コナンは、体力を

消耗し、意識を取り戻す気配がない。重病という事で、救急車はコナンを優先しこの場所に

来た。

『・・・ボウヤ・・返事出来るかい?』

「コナンは哀がやつたように救急隊員に意識確認をされ、脈拍を確認されていた。

コナンの様子に一刻を争つと判断し、救急車に乗せられた。のちに、コナンの体には、

心電図モニターと酸素マスクが装着され、哀と、博士も、救急車に乗り込んだ。

・・・ピー・ピー・ピー・

救急車は、サイレンを鳴らし緊急のため信号を無視し、病院へ向かう。

そして、米花総合病院に着き、ストレッチャーで早急に運ばれた。

一米花総合病院一

『容態は?』

医師が救急隊員に聞いた。

「意識レベル200、呼吸心拍数が共に弱く、とても危険な状態です。高熱で長時間、外に倒れていたため体力が格段に落ちています。症状の原因が…不明です。」

救急隊員は、申し訳なさそうに言った。医師は、救急隊員の言葉に了承し、袁達にここでお待ち下さいと言った後、手術室へコナンを連れて行つた。

すぐに、手術中 というランプが点いた。

- 3 - 帰つてこない・・・（後書き）

徐々に、一話一話が長くなっています。（メインの場面に入るの
で）

今日は、アンコールがあれば、12時に更新したいと思っています。
どちらになるか分かりませんが・・・

N e x t c o n a n ‐ s H i n t

病気の発覚

また、明日。アンコールがあれば、12時にーではー！

- 4 - パナンに降りかかった原因不明の難病（前書き）

医師の名前は、テキトーですが・・・
まあ、読んでみて下さい・・・

- 4 - ロナンに降りかかった原因不明の難病

「ロナンは、学校帰りに途中で倒れてしまい、救急車で米花総合病院へと運ばれた。

しかも、容態が安定しないという事態で手術室へと運ばれた。ロナンを襲つたのは何なのか？

あの後、博士が探偵事務所に電話をかけ、蘭と小五郎が来た。三時間経つたが、相変わらず

ランプは点いたまま。手術室前にいる、博士、哀、蘭、小五郎は無事な事を願つていた。

――時間後――

ランプが消え、一斉に一同が立つた。手術室から出てきた医師は疲労が見え、明らかに大変な手術だつたと窺えた。

「医師の吉川です。ロナン君は、」

一同は、息を呑んだ。ただ、ただ、無事で。と願っていた。

「一命は、取り留めました。」

一同に、笑顔があふれていた。だが、その笑顔は、一瞬にして消えた。

「ですが、コナン君は、我々でも病名が分からぬ病気にかかります。」

一同から、代表で蘭が聞いた。

『・・・どんな、病気なんですか?』

蘭の声が、震えていた。医師は、眉を下げて言った。

「・・・内臓がどんどん壊死していいのです・・・」

一同は、とても驚いて声も出なかつた。蘭は、耐え切れず涙があふれていた。

さすがに、哀も田を見開いていた。

「・・・全力を尽くしていますが・・・進行するばかりで・・・」

ただでさえ、落ち込んでいた一同に、更なる重荷が圧し掛かる。

「・・・コナン君は、治療法が見つからない限り余命はもつて半年かと・・・」

蘭は、その言葉に声が出なくなり、しばらく沈黙が続いた。だが、沈黙を破ったのが小五郎だつた。

『・・・治療法は、必ず見つかるんですよね?』

小五郎は、一同が聞きたかったことを口にした。見つかると言つてほしい・・・だが・・・

「・・・見つかる確率は、低いです・・・」

一同には、信じられない真実だつた。

七歳の江戸川コナンは本当の年齢ではない。本当は、十七歳だ。しかし、十七歳でも

まだ、人生は始まりに過ぎない地点・・・これからとこいつ時だ・・・

哀は、頭が真っ白になり思わず・・・

『・・・工藤君・・・』

と口にしてしまった。蘭は、哀の言葉を聞き逃さなかつた。そうこうしているうちに、ストレッチャーが、手術室から出でてきて今は静かに眠るコナンに一同は呼びかけた。

『コナン君ー』『江戸川君ー』『コナン君ー』『コナンー』

まだ、目覚めるわけがないと思つたが、一同は自然にコナンの名前を呼んでいた。

コナンは、集中治療室に入れられた。

「随分、コナン君が目覚めたら笑顔で接してあげて下さい……。

コナン君は、手術した時も生きよひとつ頑張っていました。なので・

・

コナンは、生と死の生の方を必死に辿り、生きている……。一同は、先生の言った事にコクリと頷いた。

- 4 - ハナンに降りかかった原因不明の難病（後書き）

今日は、カルタ編の後編ですね！楽しみです
四話は、楽しんでいただけたでしょうか・・・?
とても、不安ですが・・・（文繋げるのが下手なので・・・）
次の話は、蘭がメインとなります。

N e x t c o n a n - s H i n t

ハナンの正体

皆さま、今日は何時くらいに更新するのが都合いいですか？
答え待っています！

・5・ パナンの正体・・・魔の願い・・・(前書き)

これから先の話で、登場させてほしいキャラクターはいますか？
答え待っています！

ps

答えてくれた方の書いたキャラクターを詰めよつと詠っています。

- 5 - ロナンの正体・・・蘭の願い・・・

ピッ・・・ピッ・・・ピッ・・・・・

集中治療室の中では、規則正しく鳴り響いている機械音がロナンの生きている証と

なっている。これが、乱れてしまつたり、ロナンは命の危険にさらされてしまう。

一同は、そんな事を考へてゐるうちに緊迫感でいつぱいになつた。ロナンは、術後三時間経つても目覚める気配がない。ロナンは、青白い顔をし、

目を閉じていた。

「ロナンはまだ、面会禁止となつていて、一同は窓越しにロナンを眺めるしか、

出来なかつた。

蘭は、ロナンを見つめながらさつときが言つた言葉が氣になつていた。

「・・・上藤君・・・」

蘭は、あの時の哀の言葉である仮説が立っていた。

「コナン君は、新一……。」

蘭は、心の中で考えていた。心中には、コナン＝新一だと確信してしまう自分がいる。

今までにも、コナン＝新一だと確信した時があった。だが、その度にコナンの口述で、

「コナンは新一とは別人だと思ってきた。だが、今回の哀の一言で仮説は確信に繋がった。

コナンは新一だと……。それと同時に更に涙が溢れた。

「・・・（新一・死なないで・・・）」

蘭は、心の中でそう強く願い続けた。

博士、哀、小五郎は明日また来ると言つて病院を離れたが、蘭だけはその場を離れなかつた。疲れが出たのか、蘭は、待合室の椅子で眠つてしまつた。

- 5 - ナナンの正体・・・蘭の願い・・・（後書き）

今日も、寒いですねー。アニメのコナンみたいに風邪引かないよう
にー（笑）

今回の話、コナンの正体ばれました。

ばれた理由が、メチャクチャですが・・・

今日は、土曜日なので夜にもう一話更新しようかなと思つてこます！

Next conan - s Hint
新一との思い出

また、夜に！（・口・*）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4827ba/>

難病と向き合ったから、知り得た事・・・

2012年1月14日17時55分発行